暮らしの充実と関係への援助

ー障害のある子の暮らし、障害のある子がいる暮らしー

原　広治

（島根大学大学院教育学研究科/島根県立松江ろう学校）

Ⅰ．はじめに

各地にはその地域の体育協会が主催する各種スポーツ大会があります。それらの大会は、どちらかといえば勝負にこだわらず、参加する者同士がスポーツを通して親睦を深めることをねらいに繰り広げられることが多いように思います。

筆者の住む町で行われたスポーツ大会。どんな種目でもなかなか選手が決まらないのが常のため、世話役は大変な思いをして選手を集めることになります。先日行われた卓球大会も同様であり、上手いか下手かを考えて選手集めをする状況ではありません。自治会対抗で行われる大会に参加するのに必要な５組の選手が決定したのは、試合の一週間前のことでした。その最後の選手となったのは、最近結婚した正ちゃん、華ちゃんのカップルでした。ダブルスに持ってこいの人選でした。奥さんの華ちゃんは、「私、卓球はやったことがないし、上手くないから。」と言いながらも大会出場を快諾してくださったようです。そして、事前練習などできるはずもなく試合当日を迎えたのでした。

試合が始まって驚きました。最後に登場した選手、華ちゃんは本人の言葉どおり上手くなかったのです。しかも、フットワークがぎこちないという程度のものではなく、サービスもレシーブも……。スマッシュなんて論外。しかし、華ちゃんペアは実に楽しそうに卓球台に向かっていました。「だから言ったでしょ。私、下手だって。」と言いながらカラカラと笑い、試合の動向には全く臆する気配のない姿に、応援席からの声援はさらに増していきます。それに応えた満足顔。かくして、試合にならない試合は幕を閉じたのでした。

「華ちゃんって、なんて飾らない人だろう」。少し大袈裟ですが、それが試合後の印象でした。華ちゃんは卓球が下手であることを自覚しながら、出場を断るでもなく試合に参加し、しかもその時間を楽しく生き生きと過ごしています。なんて素敵で魅力的な生き方でしょう。試合後も珍プレーに話は弾みます。試合に臨んだわがチームは、華ちゃんから清々しさをいただいたような気がしました。運動に対する技術力の高低で参加を決めるのでなく、下手だけど参加してみたいと思わせた華ちゃんの気持ちはどこから生じたのでしょうか。運動は下手でも運動を嫌いにならずに育った彼女と運動との関係はどうやってつくられたのでしょうか。「私は私。私は楽しんでいるのよ。」とでも言いたげな彼女のパーソナリティはどうやってできたのでしょうか。会場の騒々しさの中でそんなことを考えながら、人が育つ上でとても大切なことは、彼女のように自分は一個の主体であると思える自己肯定感であり、他のものに向かおうとする意欲にあるのではないかと感じた一瞬でした。自分で自分自身をそう思えるかどうかが、日々の暮らしを豊かなものにしていくことに大きく影響しているように思えたのでした。

そのように考えると、教育に携わる者として、「自分は一個の主体である」という感覚を子どもたちに育てていくことが、これからの大きな課題だと思えてきます。また、このことは、教育にかかわらず子育て全体にかかわることであり、しかも、育てられている子どもにも、育てている大人にもいえることと思えるのです。勿論、障害のある子どもたちやその家族にとっても同様であり、むしろ、障害があることで生きにくくなっている分、余計にこの感覚を培うことが大事であるように思います。

本稿では、障害のある子どもたちやその家族への関わりを療育事業の立場から取り上げ、関係障害を改善しようとするそこでの活動が、一個の主体としての子どもを育て、家族の生きにくさを軽減し、暮らしやすくする働きがあることについて報告したいと思います。

Ⅱ．障害の捉えと地域療育活動の展開

障害のある子の暮らしとか、障害のある子がいる暮らしを考えるとき、障害には二面性があることに気づかされます。つまり、一つは障害そのものによって生じる種々のできにくさであり、もう一つは、障害があることで本人だけではなく家族といった周りの人たちを巻き込み、本人も周囲も生きにくく、暮らしにくくしていくという二つの捉えです。しかし、例えば、障害のある子どもとその親が二人で時間を過ごしている場合、障害によるつまずきがあっても、過ごしにくさや生きにくさを感じないのに、その二人で過ごす空間に他の人やこと、ものが入ってきた途端に、あるいは一緒に過ごす場を家から外に転じた途端に生じてしまうのが生きにくさという障害であるとすれば、障害によるつまづきそのものよりは、むしろ生きにくさのようなものが問題になってくると思えてなりません。

そのように考えると、これまでの障害の捉え直しと同時に、取り組む内容や方法の変更をも迫られているといえま

す。そして、その具体的な取り組みとして、教育や福祉の分野で、いわゆる関係論的視座からの接近法が現出し、各地でその実践が行われ蓄積されつつありますが、筆者は、障害のある子どもたちへの療育活動において、その考え方による実践を行ってきました。最初からその考え方で展開し始めたというより、むしろ本人や家族のニーズに応じた療育活動をしていく経過の中で、結果的にその考え方による実践にたどり着いていたというのが本当のところかもしれません。

島根県は療育活動の場として、1984 年より県単独事業として市町村を実施主体とする「心身障害児小規模療育事業（通称、ミニ療育事業）」をスタートさせ、1990 年より「島根県心身障害児(者)地域療育活動総合援助事業」として拡充し、2001 年からは「障害児はつらつ生活支援事業」の中に位置づけ継続しています。事業の目的は、ノーマライゼーション理念普及のもと、障害児(者)が地域の中で幸せに生活できる地域づくりを推進し、日常生活圏域における障害児地域療育・援助システムの充実を図ることでした。それまで数か所の医療機関を中心になされていた療育は、県の事業方針を受け、県内のほとんどの市町村で実施されるまでになりました。このミニ療育活動は、それぞれの市町村の実状や社会資源に応じて、様々な形態で運営されていますが、多くの場合、月に１～２回程度、法人施設や児童相談所、福祉センターといった場所を会場に行われ、実施団体の業務に組み込まれた格好で進められてきました。

しかし、先に述べた生きにくさや暮らしにくさを考えたとき、その整った会場で活動メニューをこなして過ごし、終えると帰路に着くという事業には物足りなさを感じました。「暮らし」という視点を当てますと、途端に、その会場だけでは済まない、そこにいる限られた人だけでは済まないという現実が見えてきたのです。

しかも、筆者が療育活動に参画している町では、当時療育活動が行われておらず、隣接する市の活動に参加しなければならない状況でした。そのため、

○実施主体が他市でありスタッフも町外の方なので、何年も事業を継続しても、町内でスタッフが育たない。そのため、町内に住んでいる障害のある子どものことを知る地域の方が増えない。

○療育の場に行っても、いつもの身近な人（例えば保育所や学校の先生）がいないので、療育の場と日常の暮らしの場とのつながりがもちにくい。

○事業費で購入された備品は、利用している他市で活用されるのだから、町がいくら事業助成をしても、何も物が残らない。

というように、人や物の財産が残らず、地域から遊離したものとなっていました。

そこで、地域に視点をシフトした療育活動を展開することになったわけです。何度も繰り返した話し合いで、行いたい療育活動の基本的な考えについて、次のようにまとめていきました。

○障害のある子どもを単に障害のない子どもに近づけようとする発想での療育は行わない。この考え方では、障害のある子どもの今の姿を否定することからスタートした見方につながりやすい。

○しかし、そうはいっても、障害を改善、軽減したいという親の願いに共感しつつ、障害は改善すれど治らない現実を知った上で、なおかつ、改善への努力をしていくことについて十分に認めていく。

○そのためには、医療機関の療育指導やリハビリテーションといった専門的個別的療育の場への通所を併行して行い、療育の場の選択肢を減らさないようにする。

○この町で地域に出かけるためには、障害が軽減されて初めて可能なのか。この療育活動が、あるがままの姿で時には援助を受けながら普通の暮らしができるようにしていくことにつながるために、地域に広がり派生させていくことを念頭においておきたい。

○子どものもつ力をできる限り発現させようとする努力をみんなで行っていく。そのために、子ども本人へのアプローチや兄弟姉妹の育ちを考慮した家族へのアプローチ、そして、子どもや家族を取り巻く環境へのアプローチという視点から取り組んでいく。

○同じ町で暮らす者が月に１～２回程度集まる療育活動では何をねらうのか。その場で子どもの状態を変えようというよりも、親同士が悩みを打ち明け合い、支え合っていく場になるようにしていく。悩みを打ち明け支え合うのは、何も親ばかりではなく、スタッフや兄弟姉妹にも同様のことがいえるのではないか。

そして、療育活動の会場は、子どもサイズに造られた厨房があり、子どもたちが慣れているということで保育所を借りることになりました。また、療育活動に就学後の子どもたちや兄弟姉妹がみんなで参加できるように、土曜日の午後や日曜日に行うことにしました。さらにスタッフについては、次のような理由からボランティアで募ることにしました。

○開催日が休日であることから、スタッフの通常勤務の一環として参加してもらうには無理がある。

○現実的に、予算上、十分な専属スタッフが置けない。

○職務としてスタッフになると、どうしても何々のことをしなければならない立場での参加となりやすい。義務感でつきあうことは、療育の場にふさわしくない。スタッフ自身の気持ちがゆったりし時間が許すときに参加して

もらい、そのときに、スタッフの得意技を出してもらえる場としたい。

○また、療育に関する専門的知識を持ちうる方だけでなく、同じ町に住んでいるから、興味・関心があるからという理由でも気軽に活動に参加してもらう。

さらに、親の代表にもスタッフとして参画してもらい、夢を語り、ニーズが反映できるようにしました。そして、いよいよ療育活動の幕開けです。

療育活動のスタートは、参加する家族に、どんな子どもに育ってほしいか、あるいは何に困っているかという問いかけからだったように思います。そこから、スタッフや活動メニューを考えていきました。

「人と交わるのが好きな子どもに育ってほしい。楽しい場にしたい。」という声が多かったことから、子育てに詳しく、子どもを楽しませてくれるのが得意な保育士や教員をスタッフに募りました。スタッフにとって、いつもと異なる場での療育活動は、親と子の両方とも仲良くなる場になるとともに、日曜日の活動を終えた次の日、つまりは月曜日にもまた会えるわけですから、共有した日曜日の活動を保育所や学校での活動に関連づけ発展させていくこともでき、好評です。「子どもを抱いたまま、もう一方の手だけですくって食べられるような食器がほしい。」という声に町の陶芸家がスタッフになり、オーダーメイドの器を焼いてもらっています。子どもが一人で食べられるようになってから食を楽しむのではなく、食べやすくする工夫をしながら、毎日の食を楽しみたいわけです。暮らしから離せない食を大事にしたい思いから、子どもが喜ぶ食事やおやつをいつも工夫してくれる栄養士や調理師の方もスタッフです。障害のある大人の姿を知っている福祉施設の職員もいます。小児科医、歯科医、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、福祉行政・教育行政担当者、子どもたちが小さい頃からよく知っている町の保健婦、音楽の面白さを教えてくれる音楽教室の先生、「身体を動かすこともいいぞ。」とやって来てくれる運動教室のインストラクター、ちまき作りや畑仕事を教えてくれる地域のお年寄り……。「何か面白いことをやっているらしい。」という口コミが広がり、スタッフの数は次第に増え、活動から7年が過ぎた現在、100余名の登録をいただいています。

療育活動の中身ですが、活動内容をいくつか準備しお店を開いておいて待ち受けるという格好を取っています。そのお店には、スタッフの得意技を活かしたものを用意してもらいながら、毎回同じものがあるようにも配慮しています。具体的には、紙漉や木工、陶芸、調理、お菓子づくり、あるいは畑仕事やボール遊び、水遊びなどですが、できるだけ子どもと遊びの間に他者が介在しやすい砂や粉、土、水といった形が変わるものを取り入れようと考えています。また、医療や福祉、教育に関する相談会を定期的に開設し、一人一人に応じた個別な対応も取り入れています。

Ⅲ．地域療育活動の実践から考えること

1　療育活動の風景から

人はその誕生から死に至るまで、周囲のモノ、コト、ヒトと何らかの関係をもって生きています。障害のある子どもたちも同様なのですが、障害があることによって、これらとの関係にも障害が波及し生きにくくしています。それに対し、医療機関であろうと福祉や教育機関であろうと、この関係障害に取り組む場が必要になってくると考えるのですが、なかなかそのような対応が十分行えていません。そこで、筆者らは、それを療育活動の立場から接近しようとしたのです。

以下、実際の療育活動の場面で、見聞する風景を連ねてみることにします。

○手遊び大好き均くん

「髭爺さん」や「げんこつ山」の手遊び歌が大好きな均くん。きっと、家庭でも母親相手にやっているのでしょうが、その執拗さに母親は少し閉口気味のようです。「また、するのー。1回だけだよ。」と少し面倒な顔が見え隠れします。

しかし、大人がいっぱいいる療育活動の場は、均くんにとって楽しみの場です。自分につき合ってくれる人を何人も替え、相手に自分の手を持つように仕向け、手遊び歌を何度もせがみます。手遊び歌がわからない男の大人にはあまり近づきません。わざと間違えて、途中でやめようとする狡い大人には、次回からは「本当にやってくれるのー」という視線を投げかけてきます。やってくれとせがむ姿をみながら、手遊びを通して、たくさんの人とつながる均くんの勢いを感じます。また、均くんの好きなことを知ってくれている人がいることで、均くんが暮らしやすくなっていることに気づきます。なぜなら、均くんを見たなら、まずは手遊びをすれば関わりがもてるのですから。

○お菓子の宝庫を持つ愛ちゃん

円筒状の缶にお菓子をいっぱい詰め、いつも両腕で抱えながらやってくる愛ちゃん。全部食べるわけではなく、持っていることで安心です。両腕にお菓子の宝庫を持つ愛ちゃんは、それだけで、周りから話しかけられ、関わりのチャンスを持ちうる子どもでした。療育の場で、愛ちゃんに会うと必ず「お菓子を少しわけて。」とせがむ大人がいます。でも、くれません。「くれない」という明確な意思表示というよりも、話し手の気持ちが愛ちゃんに伝わらなく、肩透かしを受けているような情景です。そして、このやりとりが続いた1年後、やっとチョコを一つわけてくれたのです。せがみ続けた大人側の根気勝ちでした。そのことを

母親に話すと、「あー、そのお菓子はあの子はあまり好きじゃないのよ。」とバッサリ。でも、その次にあったときもくれたのです。今度はクッキー。そのことを母親に告げると、「へー、それはあの子が好きな物なんだけど……。自分が好きな物でもあげるようになったのかなぁ。」と不思議顔。筆者には、自分が好きな物をあげたいほど、いつも話しかけてくれる人を好きになったと映ったのですが。療育の場は、家庭では見られないわが子の一面に出会え、母親の気づきにもなる場であるのです。

○手作りうどん名人の弘くん

活動メニューのうどんづくりが始まると、いつも腕まくりをしながら真っ先にやってくる弘くん。でも、以前はそうではなかったのです。

うどんづくりに最初に興味を示したのは、実は弘くんの父親でした。弘くんを連れて療育活動にやってくると、まずうどんづくりのコーナーを探し、すぐに活動開始。スタッフや他の参加家族と実に楽しそうに作業を続けます。一緒にいた弘くんも、どうやらこの場が好きになったようです。そのうち、うどんに飽きて他の活動に行く父親から離れて、自分一人でうどんコーナーにやって来るようになりました。汗をかきながら粉との格闘を終え、生地を製麺器に通すとうどんの形になって出てくるあの瞬間がたまらなく好きなようです。そのうち、粉の買い出しも任され、会場近くのスーパーマーケットに買い物に行くようになりました。

手作りうどん名人となった弘くんにとって、うどんづくりとの最初の出会いはあまり意味をもたず、ただ周りが楽しそうにやっているのにつき合っていた程度のものだったのでしょう。いつも一緒に活動するスタッフにとっても、「楽しめればいい」というほどの思いだったのかもしれません。しかし、やがて、弘くんとスタッフの二人にとって「うどんづくり」は大事なことになり、興味をもつばかりでなく、「ぼくはうどんづくりが好き」とか、「粉をこねるのはなかなかだけれど、みんなが美味しそうに食べてくれるのが楽しみ」というように意味をもつようになってきました。そんな弘くんの姿を周りから眺めると、「自主的に、積極的に、一生懸命に活動する子」と映ることでしょう。

○活動しながらの井戸端会議風話し合い。これも大事な相談事業。

療育活動に家族揃ってやって来られることで、家族関係が直接にリアルに映し出されると同時に、その場での話し合いが可能となります。医療機関や療育センターでの診察室や相談室では、この家族力動はなかなか見られないことではないでしょうか。ここでも療育活動が関係づくりの面で意義深く、支援の場として適していることが伺えます。

療育活動での相談は、保育所といった生活の場を活用し、そのための場を特設していません。いつでもどこでも相談可能で、相談したい人が話したい相手を見つけて、あるいは何気なく話し始めるスタイルですので、相談というより大きな呟きという感じでしょうか。ですから、相談は専門の相談員が受けるものではなく、親同士で解決できる内容も多いのです。整理整頓されているいわゆる相談室での相談は、受ける方にとってはやりやすいのでしょうが、相談する方は、少し格好をつけたりいいことを言おうとしたり、時にはあまり深刻でないことまで深刻のように話してしまっていたりします。しかし、療育の場での相談は、人がウロウロしていたり一緒に活動したりの中で始まるのですから、気負いがなく、家族の普段の生活態度が表れやすい状況下でのものとなり、まさしく暮らしと直結した話し合いになるのです。定期的に行う外部講師による相談会でも、相談室での個別相談が終われば、活動の中に一緒に入って過ごしてもらうようにしています。

自閉傾向のある子どもを育てている父親からの相談に対し、「子どもさんの近くで、次の行動の確認を小声でするのもいいですねぇ。」と話し、「わかりました。」と言われたその日、離れた場所から子どもの名前を大声で呼び、行動の禁止を繰り返される場面がありました。それが、普段の暮らしなのでしょう。父親の「わかりました。」は、一応の心づもりでしかなかったことを理解した思いでした。

○家族間人間関係

嫁ー姑の諍いはどこの家庭でも珍しくありません。療育活動に参加する家族も同様です。諍いの話を聞く場合、多くは嫁とか姑のどちらか一方とですが、家族揃ってやって来る療育の場では、両者と同時に話すことができ、ダイナミックな関わりが可能です。といっても、ほとんどの場合、療育活動が終わる時間になれば、自分たちで解決されているのですが。

○一緒に過ごすことでの連携

保育所に通う肢体不自由の子どもについて、作業療法士が担任に、保育所にある遊具で身体のバランスをとる練習方法を教えてくれました。すると、保育士は次の日、教えてもらった遊具を使った遊びを面白そうに取り入れてくれます。これに代表されるように、いろいろな職種の方々が集まって一緒に過ごす中で、知らない間の連携が行われています。しかも、これは、子どもたちや家族を真ん中に置き、具体的な打つ手につながる連携であると感じます。

○人の振り見て……

障害の種類や程度を限定している療育活動ではないので、多様な状況の子どもたちがやって来ます。いろいろな家族もやってきます。となれば、絶好のマンウオッチング。他の家族の様子を見ながら、「あんな夫婦はいいなぁ。見

習いたい。」と思ったり、「あの態度はいけない。私もやめよう。」と小さめの決意をしたりと、自分自身を振り返る場にもなっています。

○元気を沸き起こすスタッフの動き

障害のある子どもを育てていると、何となく「あーあ。」と気持ちが滅入るときがあります。そんな時でも、療育活動に出かけると、スタッフが思いっきり子どもたちを可愛がってくれます。その様子を見て、「私も（可愛がろう）。」とつい遊んだり、「こんなに可愛がってくれる人がいるんだ。」と、この町でわが子を育てていこうという勇気や元気をもらって帰路につく母親もいます。これも親と子、親子とスタッフといった人と人との大切な関係づくりですから、疎かにできません。一緒に過ごすことで元気になれるという不思議な力をもつ療育活動でありたいと考えています。

医療機関を中心とする発達促進の療育の場ではゴールが設定され、それに伴った療育が行われているのでしょうが、今回報告している療育活動は、それらのものが明確に設定されていないという特徴をもちます。やって来る親子や家族と、自然な形で構えずにその時間を「楽しむ」という接点で一緒に過ごすことが、ここでの基本に底流しています。それは、まるで近所のおばさんが子どもを可愛がるような雰囲気なのかもしれません。

しかし、このような普段の関わりの中に、障害のある子どもや家族を、あるいはそこに参加するスタッフを、生きやすくするための大事な鍵が秘められていると思えてなりません。そこには、やはり、障害の改善というよりは、関係障害の改善をめざそうとする営みであることが重要なポイントといえそうです。

2．療育事業を展開しながら考えていること

療育活動スタッフ勉強会において、地方で個性的な事業をしていくために、次の４点について確認しています。

1）障害のある子どもや人といることを楽しむ場であること

スタッフは障害のある子どもや人に教えようとする集団ではなく、まずスタッフ自身も楽しむ集団でありたい。スタッフが楽しむ姿を参加した親子や他のスタッフに見せていく。障害のある子どもや人と一緒にいることが楽しい場になればそれが一番いいし、一緒にいて楽しんでくれる人が増えていけば、もうそれは立派なノーマライゼーションになっている。

しかし、障害のある子どもや人をちやほやしようとすることではない。スタッフはボランティアといえども単なる親切と考えてもらうと大きな誤りであり、鍛えるところは鍛える姿勢が必要である。

2）親が生きていくのに勇気を与える場であること

障害のある子どもが学齢期を過ぎると、親が一人で一日中その子とつき合っていたり、子どもを抱える時間が長くなったりする。そこでは、学齢後に親が勇気をもって社会に出ていけるかが大切なポイントであり、そのためには、近くにその子どものことを知っている人が多くいることが一つの条件になる。その意味でも、同じ町に住むスタッフがいるだけで、親や家族に勇気がわいてくる。

3）暮らしに即した援助をする場であること

療育の場だけで終わる活動ではなく、暮らしに直結する内容を盛り込んでいきたい。これまで各地で行われている療育事業は、暮らしから離れたものが多いような気がするのも、教えようとする意図が強すぎることから生じているのではないか。例えば、受付で小遣いを受け取って、スタッフと一緒に近くのスーパーマーケットに出かけ、自分の好きなものを買って戻ってくるという活動を組めば、いろいろな人、こと、ものと、実際に、実物で、具体的な出会いがあり、わかりやすく暮らしに反映しやすい。

4）参加者が少ないことを嘆かないこと

家族やスタッフにはそれぞれ異なった暮らしがあるのだから、療育活動に来られないときもある。少ない参加者だからといって、嘆く必要はない。集まった者で続けていくことがいいことであり、療育活動が続いているということが、親の支えになるのだから。

紙漉をするために牛乳パックを粉砕しようと準備したミキサーに、子どもたちがたむろする様子を見て、「学校にいるときと違う姿」だと感心した母親がいました。ある意味、集団においてはほとんどの場合、早い子が目立って、遅い子は引っ込む場所となります。しかし、ここの療育の場は違います。ここでは、子どもたち一人一人が大事にされ、主人公として見つめられています。子どもは大事にされるとよく動き、「何かやっている。自分もやりたい。」と自分から参加するようになるのです。参加すれば他者との関わりが生まれ、好きなものができてくるという循環を構成していきます。換言すれば、自分が自分らしく動いていいんだということを学ぶことになるのです。そして、この「私は私」という感覚を前提にして、集団の場が、「他者（ひと）は他者（ひと）」ということを教える場、つまり他者（ひと）にあわせることを教える場になると考えています。

活動では、うどん打ちをしたりクッキーを焼いたりと、普通に家庭で扱われるものを題材としていくつか用意をしておきます。そこに、「これは面白そうだ」と感じた子どもたちがそれぞれ自分が気に入ったコーナーに向かって行きます。ですから、繁盛する活動店もあれば閑散としてい

る活動店もあるわけですが、それで店の善し悪しが決まるわけではありません。子どもが一人でも行きたいと思える店ならば、それでよいのです。

本物のクッキーをつくるのですから、手抜きはできません。作る順序も決まっています。その前に、買い出しも必要ですし、片付けまでしないと終わりません。それを毎月毎回するのですから、やがて作り方が子どもにもわかるようになり、先がよめるようになります。本物は構造化されているので、とてもわかりやすいのです。あわせて、スタッフが生地を作ろうとすると、子どもが卵やバターを手渡してくれたり、生地ができあがったころに麺棒を準備してくれたりと、まるで一緒に作るスタッフの気持ちがわかるかのようなやりとりが生まれてきます。そして、「クッキーを作ろうか。」と聞けば、粉と卵と……を買ってくると発想し始め、そうなれば、買い出しもさらに自分で意味づけした楽しみの一つになるのです。

スタッフが子どもたちに教えているのは、クッキーづくりが「好きになる」ことです。好きになると子どもに意欲が出てくるのです。大人たちは、つい最初から意欲的な子どもを育てようとするのですがそれは駄目で、何かを好きになるような子どもを育てると、その結果が意欲的に見えるということを再認識させられました。となれば、大人が楽しんでいることや働いているところを子どもたちに見せていく療育活動は、とても大事なものなのです。

Ⅳ．地域療育活動推進のための視座とこれから

先に述べたように、ミニ療育事業の誕生には医療が大きく関与し、そこからの発想が大いに影響していることで、これまでの療育活動は、いわば医師の診断後から保育等のいわゆる「受け皿」にたどり着くまでの医療的療育の展開、あるいは医療への補完を行うという色彩が濃いかったように思います。この考え方の背景には、障害は障害のある子ども自身のものと捉え、その障害を改善、克服しようとする考え方が横たわっていました。しかし、障害は、それが単独で存在するのではなく、周囲他者との関係によって生じています。子どもの障害は、子ども自身で完結するわけではなく、周囲他者に影響し、共に生きる家族を巻き込み、生活しにくくするという意味で関係障害を引き起こしているのです。そういう障害の捉えに立てば、支援の内容は随分と違ってきて、そこには、日常生活圏域で共に暮らす地域の人たちの助け合いも必要になってくるのです。

そこで、図１に示すような幅広い関係を考察する視座をもった療育活動を推進することが求められています。
子どもを取り巻く環境には、日常の暮らしの場である家庭や学校等の場があり、そこで「過ごす」営みがなされています。学校等から家に帰れば、近所での過ごしや公園での遊び、買物といった日常生活圏域での暮らしがあり、時には、行楽地に出かけたり交通機関を利用してどこかに出かけたりの非日常的な暮らしもあるはずです。しかも、その暮らしは、今現在が単独に存在しているのではなく、過去から今へ、今から未来へと関係をもちながら連続していっています。とすれば、障害のある子どもたちへの支援としては、一緒に過ごす場の横への広がりと、その子どもの歴史（生育歴）的評価を伴った縦への深まりを視野に入れた取り組みが必要になってくると考えます。これは、まさに、障害は関係から生ずるという考え方に基づいているのです。

障害のある子どもの障害部分を改善し克服することは容易ではありません。その子の周囲他者との関係において、障害による種々の困難の改善や克服を図ることでもまだ不十分です。そこには、障害のある子どもの自主性や自己肯定感、あるいは周囲他者の価値観にまで及ぶ壮大な営みが不可欠であり、これからの信頼される支援のためにも、ぜひとも必要な視点であると考えています。

療育活動が軌道に乗り始めた３年めから、先に述べた壮大な営みに参画するため、それまでの活動に子育て支援という観点を取り込み、新たにニーズに応じた活動を取り入れました。それは、障害のある子に閉じた活動ばかりではなく、地域に開放した活動を適度に取り入れていくことでした。それにより、障害のある子どもや家族が集うだけでなく、集団に入れない子どもたちがやって来たり、少し落ち着かなくなった子どもが落ち着くまでそこにいたりする場にもなってきました。現在、図２のような事業を実施しています。紙幅の都合で十分な説明はできませんが、例えば、様々の事情で保育所や幼稚園に行けない、行かない子どもたちが通う子どもハウスをつくろうという発想は、「おもちゃの家」づくりにつながりました。また、関係者が一堂に集まって一人の子どもや家族のニーズについて、多方面からじっくり考えていこうとする「地域子育て支援会議」を行ったり、子育てについていろいろな方々と一つの場で相談できる「医療・保健・福祉・教育総合相談会」を開催したりしています。これまでの何年かの積み重ねが評価を得て、不登校の子どもとか、「わが子が全然可愛く思えない。」と訴える母親も、おもちゃの家を訪れています。障害のある子どもへの療育から始めた事業や方法は、子育て全般への支援にも応用できるものであると改めて気づかされています。

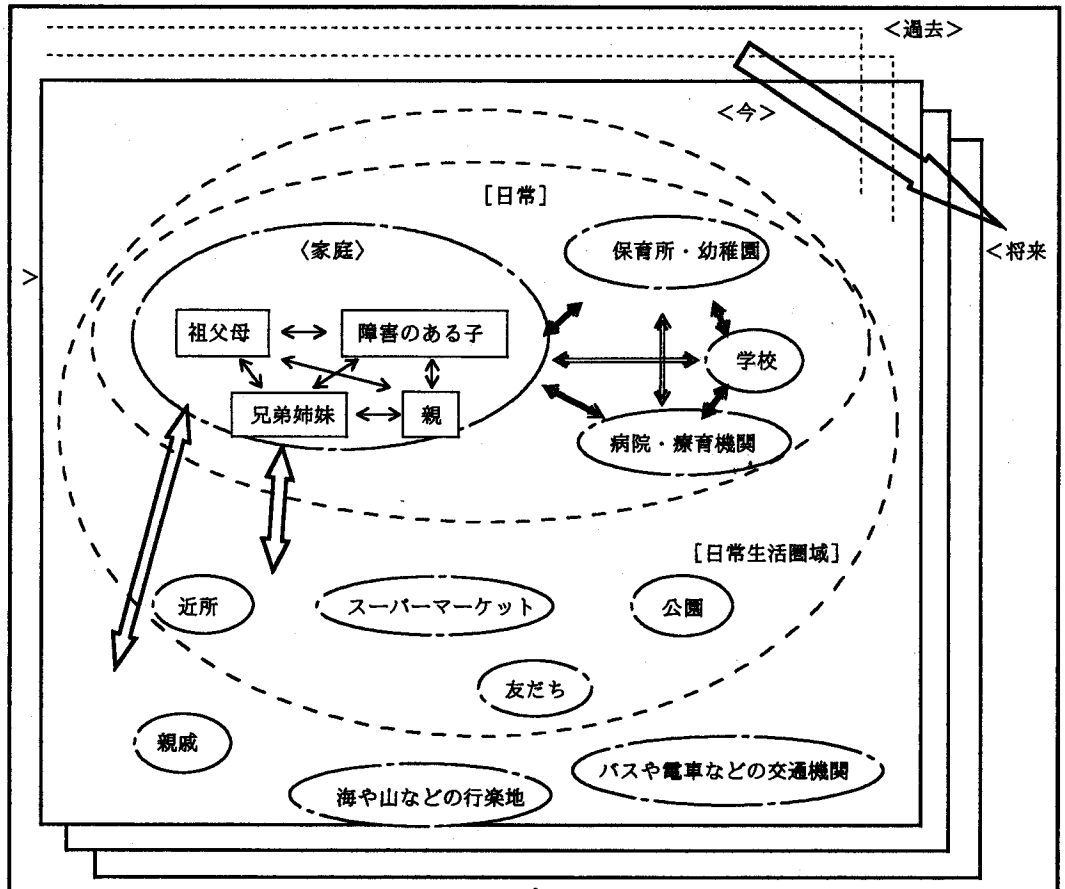

図１　障害のある子の暮らし・障害のある子がいる家族の暮らしモデル（案）

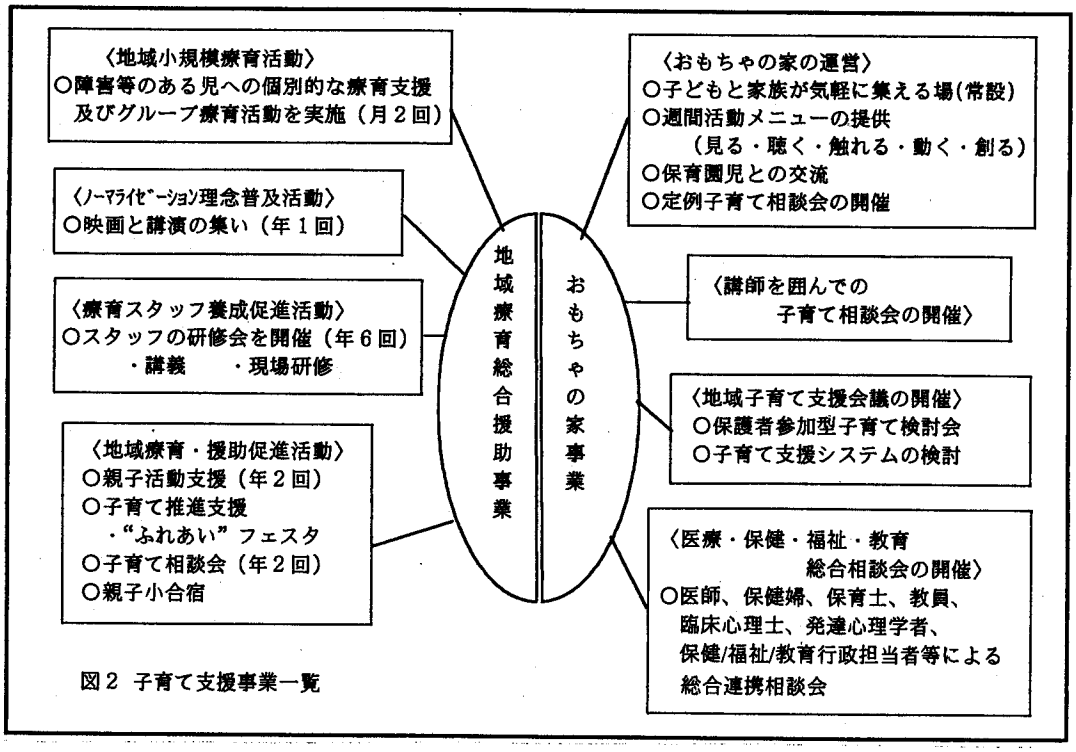

図２　子育て支援事業一覧

Ⅴ．おわりに

一人一人の子どもたち、あるいは親や家族には、それぞれの人生ドラマが織りなされています。そのドラマにつき合い寄り添うことで見えてくるものが、療育活動を通して幾つもありました。ここには、いわゆる狭い意味での障害という枠のある窓からでは、決して見ることのできなかった内容が含まれているのではないかと思います。そのようなところにたどり着く道のりは、わからないことだらけですので、効率的ではありません。しかし、わからないことだらけだからこそ、いい関係がつくり出せるチャンスでもあるわけです。いろいろな活動を通して、一人一人の子どもやその家族と丁寧なつき合いをする中でわからないことにふれる。その末に見えてきたものが、腑に落ちた理解でありわかりあいであると思うのです。

とても素敵な笑顔でカラカラと笑う母親を見て、「このお母さん、障害を受け入れておられるな。」と思えます。しかし、じっくり話をしていくと、ふっと、「この子がね、障害のない姿で『お母さん』と呼んでくれた夢をみるんです。」と仰います。「なるほどなぁ」と思うわけです。やはり、一緒に暮らしてみないとわからないことなのですが、共に過ごしてみて、その人になってみて、その家族になってみて、じっくりと思い巡らして初めて、このような言葉の意味のわかりあいが一つ一つ始まるのではないかと思います。「お母さんの子どもへの対応がよくない。」と言って、母親を責めることは容易なことですが、子どもの姿の中に母親や家族が巻き込まれていった結果が今の姿であると思えるようになるかどうかの、こちら側の姿もあるのです。母親自身が気持ちが立て直し、「よし、この子と生きていくんだ。」という姿勢をもたれるように、こちらは支援していきたいものです。

生きにくさを軽減していくこと。そこに、支援の中身が横たわっていると思えてなりません。